

北海道釧路市知人岬漁村集落形成過程の研究

布 施 正^{*}

A Study of Forming Process of Fishing Village
Shireto Cape. Kushiro, Eastern Hokkaido.

Tadashi Fuse

はじめに

この報告を書くに当って、これまで数多い漁村集落を訪ね、その集落の成り立ち等を採録したにもかかわらず、知人岬のそれを行なっていなかったのはどうしたものかという思いがよぎっている。もっとも知人岬といっても、今では釧路市街地の一部といってよいくらいの場所だから、何度も足を運んでいる。また釧路市の水産行政を延10年程担当した経緯もあって、ここの集落のもつ幾つかの課題解決を手がけたこともあったりして、何

となく知り尽くしていたような錯覚があったのかも知れない。それはともかく、知人岬漁村集落を個別に、改めて聞き取り調査を行なった結果、これまでその時々が必要があって、断片的に知っていたものがある程度脈絡を持ちうるようになってきた。知人岬の灯台のある場所から、知人浜が真下に見える。岬の崖なりに庶二無二臨港鉄道が走っている。石炭貨車が貯炭場を往き来する。昆布干場がその貯炭場の先にへばりつくようにわずかに広がっている。貯炭場は太平洋炭砒のものであり、ここから、釧路港南埠頭岸壁のローダーで本船積されていくのである。

ひとつの景観として見れば、ただそれだけのことになってしまう。しかし石炭のすぐ隣りで昆布を干していることに、歴史の視点を注いだ場合、石炭産業と昆布業との間にどのような対立や妥協があったものかと、もっと前から考えが及んでいていいはずであった。昆布浜が大きな貯炭場と隣接しているなど、きわめて稀れなことのはずである。知人岬の突端にへばりつくように、狭苦しく家並が建て混んでいる。さらに崖の上にも昆布漁家が住居している。このような姿にあることが、つまりは知人岬とそこの昆布漁村集落の歴史を象徴しているのである。したがってこの報告は、知人岬漁村集落の成立とその変遷を述べることを目的とするのであるが、とくに釧路港・釧路臨港鉄道の修築・敷設経過との係りあいを通して進めてみたいと思う。

※釧路市史編さん事務局長



第1図 釧路市知人岬位置図

1. 知人岬の地勢

地勢の変化 報告での知人岬の範囲は、西側（約1 km）は釧路川川口オダイト砂嘴基部より、東側（約2 km）は千代ノ浦海辺地東端よりの釧路段丘の海への突出部とする。両基部の幅は約1 kmである。岬全体は釧路段丘の一部で、釧路市街地のなかでは、旧市街地に属する部分が多い。

岬突出部から、釧路港南防波堤が築堤されており、現況では岬の西側は釧路港臨港地区となっている。東側は太平洋に直面しており、その意味では、釧路港修築以前と同じ状態にある。釧路港修築開始は、明治43年からで、南防波堤は、大正11年に建設が終了した。なお南防波堤基部には、南埠頭が築造されている。この埠頭部分は、ちょうど知人岬から南西に約500 m突出させた形になっており、南防波堤は、埠頭先端より北西方向に585 mの延長である。

釧路港修築前の知人岬西側は、一つは釧路川川口に沿って延びた岬部分であったので、釧路湾に面していたことを思い出さなければならない。したがって西側は、オダイト地区の延長の要素もあって、釧路湾漁業に従事する漁家が点在していた。もう一つ重要なことは、泊りであったことである。つまり釧路港修築前の釧路港というのは、知人岬によって東・南方向の風を避けえた、知人岬西側停泊地のことだった。地図で見ると、わずかの突出しにすぎない感じの岬ではあるが、襟裳岬をかわし、東航するとき、厚岸湾以西では、唯一の泊りであった。しかも釧路川川口であることから釧路川水運による内陸への入口でもあった。このような地位にあったからこそ、釧路港修築は、ここを核に行なわれたのである。

ともあれ西側は知人岬の一部というより、釧路港の埠頭、埋立地となり、さらに港湾荷役関連施設や、修築工事用地等に利用され、更に市街地と結ぶ波止場入口と変化してきた。その結果、釧路川口漁村集落であったオダイトと知人岬突出部の知人浜集落は、漁村集落として細長く連立することができず、切り離された単独の集落として歩み始めることになる。このような経緯から、知人岬漁村集落の範囲は、岬突端部の知人に始まり、東側に辨天ヶ浜、千代ノ浦、春採の4つを指すことになる。なお昭和7年の町名地番改正前の旧地名は、知人＝知人、辨天ヶ浜＝鬼呼（オニップ）、千代ノ浦・春採＝春採で、春採の一部で東端の紫雲台寄りには、静欲牛（シッポウシ）である。次に知人岬とこれにつらなる浅海の海産資源を見よう。道東海岸線総合調査の範囲を大別する一つの方法は、知人岬を基点として、以東はナガギリコンブ地帯、以西をミツイシコンブ地帯とすることができる。知人岬がなぜこのような基点となっているのかの生物学上の所見はないが、ナガギリコンブを育てている、釧路・根室段丘の落ち込む海が、知人岬から東部に始まっていることと合致している。ともあれ知人岬東側には、知人礁をはじめ昆布礁が多く、かつ近接している。各集落の主業は昆布採取である。

さて周知のように昆布採取業が成立するもう一つの条件は、干場に当てる海辺地砂浜の広狭、良否である。現状は、知人が前述のように、貯炭場前面の砂浜を利用しているが、漁家数に比し、きわめて狭少である。知人から辨天ヶ浜を過ぎ、千代ノ浦に至る海辺は、砂浜面が皆無か、あっても昆布干場に利用しうる広さはない。かつ、海岸側は防潮堤で守られ、これ以上の浸蝕を必死に防いでいるといった方がよい。さらに辨天ヶ浜の一部を除いて、石炭輸送用の臨港鉄道が、あたかも防潮堤を線路護岸の一部とするように、海辺ぎりぎりに走っている。このため

昆布干場に、白樺台方面の岡干場を利用していることは後述しよう。

千代ノ浦に入ると海辺地砂浜は、ようやく広がりを見せる。砂浜は延長約500m、幅2～30m程である。海側は昭和40年前後に設置された防潮堤で守られている。したがって表面から見れば、辨天ヶ浜などより昆布採取業のためにはずっと有利に見えるが、土地所有関係からいうと、すべてを昆布干場に利用しえない。さらに漁家戸数に比較し、面積が足りず、やはり白樺台方面の岡干場を利用しているのである。にもかかわらず知人岬漁村集落が、明治初期より今日に至るまで、代が代わり、また人が変りながらも続けられているのは、知人礁の昆布が豊富であるからに他ならない。そして一方では干場に使用してきた砂浜中、特に辨天ヶ浜などはその痕跡すらも見せないほどに変化してきた。

マクロに見ると、この地帯はしだいに海蝕が進んでいく性質があるというのが、地質専門家の所見である。このことを特定の地区である知人岬漁村集落に当てはめて見たとき、どのようになるものか。産業面で、経済面で、そして社会的な関係から、そこに住む人間関係にまで様々な影響を及ぼさずにはいないはずである。従って知人岬漁村集落史は、海蝕の進行、釧路港修築、貯炭場造成、臨港鉄道の敷設と深くかかわり合いながら述べられていくことになる。

2. 明治初期集落の離散

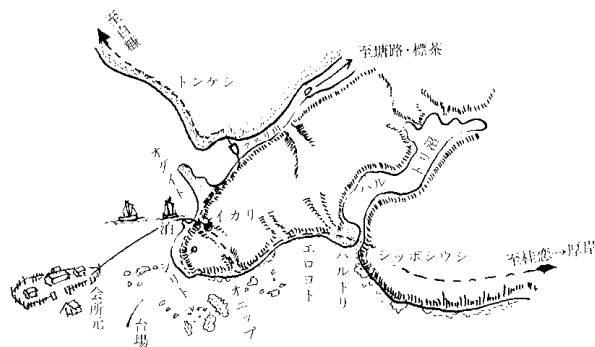
幕末期 前幕期から、幕末に至る間、知人岬には、当時の幾つかの紀行などから、まだ漁村集落が形成されていなかったことがわかる。

まず岬の呼称は、「オニツ岬」、「クスリ岬」、また「シリイト岬」などといわれていた。岬の基部西側に、釧路場所の元締である、クスリ会所があり、かつ勤番所があった。さらに周辺と、釧路川沿いに、前幕期には、7～80戸、幕末期では20戸前後の夷家があった。

ここに会所が立地しえたのは、知人岬西側が、厚岸には比すべくもないが、幌泉に勝る掛淵、つまり泊として利用しえたからである。さらに、釧路川水運により釧路・根室内陸と連絡する地点でもあった。また岬に台場、烽火台がおかれ、国防の一部を荷っていた。

また会所元は、日高・十勝方面から、厚岸、さらに根室・国後・択捉へ往來する場合の、宿泊地でもあったので、宿泊・伝馬の施設も備えていた。つまり、現米町1丁目附近（海岸がもっと近かった）に、会所を核に小さな集落があった以外、岬部分は、漁場として利用される程度であった。紀行の一つで、松浦武四郎の蝦夷日誌だけが、知人岬を海岸沿いに一周している。

「又運上屋より海岸通りをハルトリの方へ行は、5～6丁行てシリエトと云岬有、越て砂浜伝ひをしばし行てヲマヤウ、エヲトロ等名る所を越て、東の方へ上り砂浜にして波も穏なり、越てしばし東向に行やいなやハルトルへ本道有落合也」。第1図を参照してほしい。その他のものは、会所元より、現辨天ヶ浜の方へ歩き、海岸沿いに春採を通り、桂恋方面へ行く道路を通っている。紀行のなかで知人岬海浜地のうち、漁小屋があったのは、弘化2年の蝦夷日誌だけである。



第2図 幕末期知人岬附近図

一方、クスリ会所直属の主要出産物に、釧路の鮭と、昆布があり、昆布は3,500石程というから相当の量である。そしてその昆布は、知人岬の海辺を干場とし、産出していたものであろう。また、会所元の夷家は少ないが、昆布季節には、内陸のアイヌの浜稼ぎも相当あったので、知人岬の海辺には、晴天のときなどは一面に昆布が乾されていたと思われるのである。しかし、そこは住居を構えるに至っていなかった。

明治初期の移住・幕末期の釧路場所請負人佐野は、根室開拓使の方針に従い、明治3年釧路場所に、函館、その近郊、青森、秋田等より、定住を条件に漁民を招募し、移住させた。その具体的な内容は、未だ解明されていないが、このうち知人岬周辺に入地したものに限って考察してみたい。資料は「御子紫文書」²⁾である。

移住地は、①当時の「米町・真砂の内」53戸 ②「釧路村の内」43戸の二つに区分されている。①の方は、釧路場所全体に対する管理機能、また港の役割を持ったところなので、それが職種にも現われ、場所支配人等の他、桶職・カジ職・仕裁・大工・木挽職、鍼医にまでおよぶ。その他職種の記載のないものは、港の作業、会所廻りの仕事等雑役でなかったかと推測される。また漁場関係者も含まれていたであろう。

「釧路村の内」の方は、木挽・桶職各1名以外は昆布漁業を主目的に入地したものと見てよい。なお「釧路村の内」の範囲は、現知人・辨天ヶ浜・千代ノ浦・興津の各浜を指している。さらに集落別については、「加茂家干場台帳」によってほぼ推測できる。

この干場台帳は、明治9年現在のものと考えられ、氏名中佐野孫右エ門所有分以外は、地積から見て、各人1～3艘浜程度の所有である。集落別では、静欲牛(1)、春採(15)、鬼呼(12)に区画されていた(官地を除く)。鬼呼の12区画中、佐野分が2区画あり、面積9,760.70坪であるから、およそ20艘浜に相当する。干場台帳には、鬼呼につづく知人の地名がを省き、知人岬対岸の頓化に続いている。しかし、乾場台帳地積を、静欲牛から春採・鬼呼と順次地図に落していくと、鬼呼分の、佐野孫右エ門・竹脇宗吉・佐野孫右エ門の区画は、知人海辺に相当することがわかる。このことから、知人岬の各漁村集落は、およそ次のような状態にあったと推測できま

集落別居住者表

—加茂家干場台帳より作成—

静欲牛	春	採	鬼 呼
関留吉	佐藤豊吉	(秋田亀吉)	滝沢勇吉
	橋本与惣吉	(滝沢丑松)	(菊地徳次郎)
	(大坂助右衛門)	(浜野石松)	(伊畑林 麿)
	(鎌田甚助)	(鎌田柏太郎)	上林倉吉
	(能地久吉)	西野松太郎	湊安五郎
	(秋田富吉)	佐藤作右衛門	菊川三太郎
	(滝沢丑松)		金子清吉
	(富野松之助)		伊藤太郎吉
	(富野松之助)		野田金次郎
	(齊藤遜兵衛)		沢林徳兵衛
	孫市		{佐野孫右衛門
	関留吉		{竹脇宗吉
	大坂助右衛門		{佐野孫右衛門
	秋田亀吉		{は現知人に該当
	(竹原市蔵)		する。
	(浜野石松)		
	(太田吉太郎)		

注：□ はその上段の前居住者

いか。

—知人—干場の殆んどは、漁場持である佐野の所有になっていた。佐野は昆布採取を直営したはずであるので、そこには、仕込を受けるか、雇用されるかの、まだ独立しない漁家が居住しており、さらに漁期には、米町・真砂の内の移住者も番屋住いで昆布を採取していた。知人は水の不便な場所だということも考慮に入れ、まだ集落化は不充分だったろうとみる。

—鬼呼—9戸が干場を所有し、独立漁家がほぼ連站した集落を形成していた。

—春採—15戸で、鬼呼とはほぼ同じ状態で

あったとする。

一静欲牛一春採湖と海を結ぶ川を境に、東の地区であるが、台地が海に迫っており、海辺地は狭く少なく、一戸のみである。春採と同一の集落としておく。

定着率 以上の移住漁家が、どの程度定着したかを考察しよう。実は集落別の聞き取りでは、移住者の家系で、今日に引続いているものは、知人で西野松太郎が入婿で、現三上家に続いている以外皆無といってよい。現住の昆布漁家の殆んどは、明治末期から大正初期に新たに入地したものという結果であった。これまで、釧路市史の研究分野で、明治3年の漁民招募移住の事蹟をもって、釧路市の開基としているが、集落別に見ていくと、そのことが必ずしも集落化の基礎になったとはいえないのである。

初期移住者が、定着しえなかった理由、再移住先等を明らかにすることは、今となっては困難である。わずかな事例であるが、春採に入地した、佐藤沢蔵の場合は、家族の一人は、十勝の利別へ移り農業を、他は釧路市内の川上町に漁業のため再移住した。

ここで明治初期から、同20年代の末迄の昆布業の状況を振り返って見る。元来この地帯の昆布は、支那輸出向であった。この輸出を円滑にするため、広業商会、日本昆布会社等の政策機関が設けられ相応の努力はしたが、必ずしも順調ではなかった。特に昆布は時折り流水の被害により極端な収穫減となる。まして移住漁民は、資本を持たない細民であった。昆布だけで年間の生計をまかないえない。つまり漁家というより、一介の労働者で、昆布時期には昆布を採るが、他は様々な仕事につかなければならなかった、と考えるべきなのである。釧路自身はその後市街化が進み、港・漁業・石炭・木材等産業が発展するので、わずか50戸程の移住者を吸収することは、容易だったと思う。ただ、これまでの調査で、このことは実証されていないが初期移住者の家系が、引続き現昆布漁家でないことだけは明らかである。

3. 集落の再形成（明治期～大正初期）

乾場所有権の移動 「北海道植民状況報文釧路国の部」は、明治20年代末の干場所有状況について、昆布漁家中、自ら干場を所有するものは皆無に等しく、すべて釧路市街商人等の手中にある。漁家はこれを借り、かつ仕込を受け、産出した昆布は、これら商人の意にまかされ、仕切られ、彼等の生活は甚だ貧困であるとしている。これは釧路に限らず、当時の一般的な状況であった。細部はおくとして、明治5年「北海道土地売買規則」等により、自営漁民育成政策で、一旦は干場を所有したが、その後仕込代金の抵当などで、20年代末には殆んどが商人所有になったものである。

さて、知人岬集落の場合に限ってみよう。

第1は知人干場である。ここは少し事情が違い大部分が漁場持佐野の所有であった。明治9年漁場持廃止の時、佐野は経営破綻のこともあって、事業資産を広業商会の支配人、武富善吉に譲渡した。明治13年のことである。武富の釧路進出がここに実現した。武富は一方では広業商会の組織、さらに日本昆布会社等を利用しつつ、事業を拡大していく。武富はその後地場金融資本に変質していくが、大正初期家産が傾き、釧路での事業は終熄する。次に知人干場の所有者となったのが公斉藤栄太郎である。公斉藤が何時、どのような方法で、知人干場を所有したかの詳細は不明であるが、同人が釧路に進出した時期、背景などからおおよその推測ができる

ので、その点にふれてみよう。

公齊藤は秋田生れであるが、函館の海産物商の出張員として、釧路に来住する。明治33年9月、釧路で独立し、海産物商を始める。同39年以降町会議員となる。公齊藤は知人に居住し、大正の末に南大通りに移転した。明治31年頃は、日本昆布会社が整理解散していくばくもなく、支那輸出の実権は、函館中心の華商による居留地貿易として再び盛んとなる時期である。とくに明治30年から大正3年迄の15ヶ年は、全盛時代といわれる。ともあれ公齊藤はやがて知人干場をほぼ手中に納める。この干場が、太平洋炭硯貯炭場造成用に買却されることは後述する。

—鬼呼—ここは10人の個人浜であったが、大正初期の状況では、公齊藤、他に藤田等の所有になっていた。大正2、3年頃ここで、見田、つづいて中村らが水産加工業をおこなう。見田は公齊藤より干場を譲り受けたという。この時期はちょうど、釧路でも機船底曳網漁業が開始されだし、魚粕、開鱈製造が盛んになる頃である。干場は、昆布の他に加工業用に併用される。

—春採—明治40年前後、釧路は小鯨の豊漁期である。春採には津島の鯨漁場があつて、広く干場を所有していた。現在は㊦佐々木の所有である。また鬼呼の見田と同郷の佐藤らも大正初期には開鱈製造をはじめていた。大正中頃、ここに橋本岩次郎が、昆布漁家として、釧路市街から移住する。橋本はそれまで、手繰漁業をしていたが、魚粕暴落などで、昆布に変わったのである。橋本の干場は、三進藤金物店のものだった。橋本が移った頃、春採で他に昆布干場はなかったという。㊧菅野がここに移り水産加工を始めたのは、大正末頃である。現在いる昆布漁家は、それ以後の人が大部分だという。

以上の聞取りの際、明治初期入地の氏名のものを尋ねても、誰れも知らないという。そして現在の昆布漁家は、一部例外を除いて、明治末期か、大正初期以降居住したものが、最も古い人達であるということである。

多少前後するが、明治18年の「昆布出産人貸金調」⁵⁾がある。のちこの貸金は、政府が棄損することになるが、昆布漁家は、生活資金の援助によって、ようやく生活を維持していたものであることを充分うかがわせている。なお、この時期の昆布業については、『支那輸出昆布の需要が、幕末期から、明治初期にかけ急増し、これに対応するものとして、釧路・根室の昆布業が展開されたが、それは、流通段階では有利な事業であっても、昆布採取を主業とする漁家(細民・小規模経営)経営は成立しなかった』というのが先学の見解とされている。まして前述のように昆布採取より有利な仕事があれば、釧路市街に近いだけに、容易に転換しえたことは充分に考えられる。これらのことから明治3年に形成しかかった集落は、移住者の離散によって、ほぼ解体したものと見るのである。しかし、干場と知人礁の昆布は、依然として後代のものに引継がれる。

釧路漁業の変質 この時期の釧路全体の漁業概況を見よう。最も盛んなのは、曳網・建網による小鯨漁業であった。そこに旋網漁法が八戸方面から導入され、多数の船頭・漁夫達の入漁・入隊があつた。漁期は5月～8月上旬である。次は手繰網と鱈・目抜延縄である。5月上旬から手繰が始まり、秋口から春にかけ、鱈・目抜をとる。明治30年代から、新潟・富山方面から移住したもの、また入漁・入隊者の仕事であった。またこの頃より和船による鮪の流し網魚がはじめられていた。秋口には鮭定置漁である。これ等と別に昆布業があつた。これを経営階層別では次のように整理される。

- ①鯧・鮭漁業の上層経営者（一部は昆布等に仕込をする）
- ②手繰網、鱈・目抜延縄の小規模経営者（新潟・富山等よりの新規移住者）
- ③昆布主業の小規模漁家
- ④漁夫（釧路在住と季節入稼あり）

さて明治末期から大正10年前後にかけ釧路漁業は大きく変質した。そしてこの変質は、知人岬漁村集落の形成にも同じく、大きな影響を与えたといえる。

第一は小鯧漁業である。明治30年代末までは、漁法は建網・曳網であった。漁獲も大きくなかった。漁業技術面からいうと、魚が接岸するまで待つという消極的な漁法であった。そこへ八戸から旋網漁法が進出してくる。さらに40年代～大正初期は、小鯧の豊漁期に遭遇し、釧路は小鯧景気を謳歌する。八戸方面から多数の漁夫が釧路へ移住した。そして間もなく小鯧漁は薄漁期に入った。

第二は手繰漁業の動力化である。和船手繰は、主に新潟方面からの入漁・入稼であった。釧路は、未開発魚田だったのである。二百数十隻の出漁があった。大正初期には、機船底曳網が出現する。和船手繰は次第に圧迫される。第一次世界大戦後、魚粕の暴落で、手繰は全体に苦境に陥る。このなかで、機船底曳は漸次大型化しえたものが生き延び、和船手繰との漁場競合が激しくなる。

鱈・目抜延縄は、機船底曳との漁場競合もあって、次第に縮小していく。⁷⁾

一方、鮭流網が次第に盛んとなり、釧路の中心漁業等の一つとなってくる。

この変質を漁夫層・小規模漁家の立場で見ると、どうなるであろう。小鯧の漁夫は、八戸に戻るか、或いは釧路で他の漁業に、また別の仕事に移る。和船手繰漁家の一部は、機船底曳船経営になり、他の一部は、その乗組員になる。また一部は、他の漁業に転身する。延縄漁家の相当部分は、鮭流網に移ったという。このような状況のなかで、昆布採取人となるもの、また昆布漁家となるものが当然でてくる。

知人岬漁業の変質 ではこの時期、知人岬の漁村概況はどのようなものであったろう。釧路湾漁業地帯全体から見れば、鯧の建場は主に頓化浜である。手繰・鱈・目抜延縄漁業者の大部分は、オダイト・西幣舞河岸を根拠としている。そして知人岬は昆布を主業とするものの居住する地帯である。しかし釧路港修築以前の知人浜は、一面では、オダイトの延長の漁村集落でもあった。したがって、昆布漁家以外の、鱈・目抜延縄漁業者の居住地にもなっていた。

また上層経営者の鯧建網・鮭建網（知人沖）の建場でもあった。これは知人岬漁村集落は全体的に見れば、昆布採取を基本として成立しているが、釧路漁業全体の影響を強く受けやすい地勢なのである。この面を各集落別に見るとさらに鮮明になっている。

一知人一明治40年前後は、漁家戸数20戸位で、このうち鱈延縄漁家7軒、専門の製造屋もいた。その他は昆布漁家。仕込主は久斉藤である。現在鱈延縄漁家は皆無である。そして現住昆布漁家の前身は、大別して、新潟県間瀬出身の手繰、八戸の小鯧、富山の鱈延縄、その他、日本海鯧場からの移住者等で、その多くは、早くて大正初期の居住となっている。古老のいう「知人はあづばり人間だ」という言葉は、このことを適確に表現したものである。

一辨天ヶ浜一大正初期は昆布漁家10戸で、鱈・目抜延縄漁家2戸あった。藤田が買って製造

してた。この他、齊藤の4軒長屋があり、昆布採りが住んでいた。飯塚（鯨建網）の番屋もあった。建網は建網だけしており、昆布漁家の1年はおよそ次の通りである。

春—2月から銀杏草と鱒釣り。棹前はしない。

夏～秋—7月から昆布で10月一杯とる。

冬—キウリウオ刺網・北寄曳をする。

この他、港の仲仕の出面にでる。

なお昆布採取は、家族のみのものと齊藤の長屋を借り、仕込を受けてやるものもいた。辨天ヶ浜に見田、中村水産の製造場が立地するのは、前述機船底曳網漁業との関係である。またかつて鯨建網をしていた飯塚は、現在ここで昆布漁家になった。

—千代ノ浦—大正の末でも、千代ノ浦は一面のハマナス原で、その中に馬車一台の通る道があった。その頃は製造屋で、◎佐藤・令佐藤・引佐藤の一族、刃河連が浜側におり、他に昆布で橋本、建網で㊦・㊧、他に住んでる人はいなかった。ただ沼尻にぽつんと1軒、「関さん」の家があった。茅野公園に遠足の帰り、この家を見ると、釧路へきた気がしたという。当時千代ノ浦は、昆布干場というより、開鱈、魚粕等の干場に利用されだしていたのである。大正の末は、機船底曳網による魚が、盛んに魚粕にされていた。干場は頓化方面が主だったが、新規に加工で独立するものの割込む余地はなかった。またオダイト地区は、釧路港修築の進展、また市街地化により、製造屋はそこから移転せざるを得なくなってきた。千代ノ浦は、オダイトの荷揚げ場から、馬車で1時間程で、原魚を運べる。やや遠い場所ではあるが、製造干場としてはまずまずであった。反面昆布漁村集落の方は、ようやく片鱗が見えるにすぎない。

以上で、釧路漁業の変質が、知人岬漁村集落の形成と深い係りがあったことが、ほぼ浮き彫りされたと思う。

しかし、現在見る集落は、以下の海辺地自然決壊、釧路港修築等々により、更に変質してきたものであることの結果なのである。

5. 釧路港修築等と知人岬集落の変容

海辺地の自然決壊 加茂家干場台帳によって、明治初期の海辺地砂浜をほぼ復元できる。ただし、この場合、基点が明らかでない欠点はあるが、現況を辨天ヶ浜（鬼呼）で照合して見ると、奥行は20～30間あるので、現地形から考え、防潮堤基部面から4～50m幅の砂浜になっていたことは明らかである。

ここに臨港鉄道の敷設が完成したのは、大正14年のことであったが、当時の漁家の住居は、大部分がこの鉄道路線より海寄りにあった。現在では米町本通りの終点附近だけになっている。これも昭和46年台湾ボーズといわれた、高波・高潮被害のあと、本格的な護岸工事が土現によって施工された結果、ようやく維持されているものである。したがって、この工事がなかったとすると、線路から海側には1軒の漁家も居住してないことになる。そして臨港鉄道路線面までが保守されたと仮定すると、辨天ヶ浜の景観は、高波のときは、波しぶきを浴びながら、石炭列車が、海沿いに防潮堤の上を走っているようになっていたであろう。そしてそこはもう漁村集落のただずまいを全く見せない場所に変っているはずである。辨天ヶ浜から知人に抜ける崖面に近い景観と同じと思ってよい。海辺砂浜地がどの程度決壊したかを、昆布漁家は次のよ

うに説明する。

その一は、「昆布2並べできたとか、3並べ干せた」と表現する。ナガナガキリ昆布の長さは平均12~13mである。つまり25~30m程の奥行の砂浜があったということである。さらに昆布は汀線より10m程離して乾かす必要がある。それは砂中に蓄えられている適当な温度が昆布の乾燥に必要な条件であるためで、汀線近くは海水が浸透しているため、温度が高まらない。そのことを経験的に知っているのも、あとは砂浜の傾斜度との関係から、汀線からどの程度離して乾すか、その日の気象状況等を加味し判断する。別な言い方をすれば、昆布2並べとか3並べということは、40~50m程の奥行の砂浜があったということにもなる。

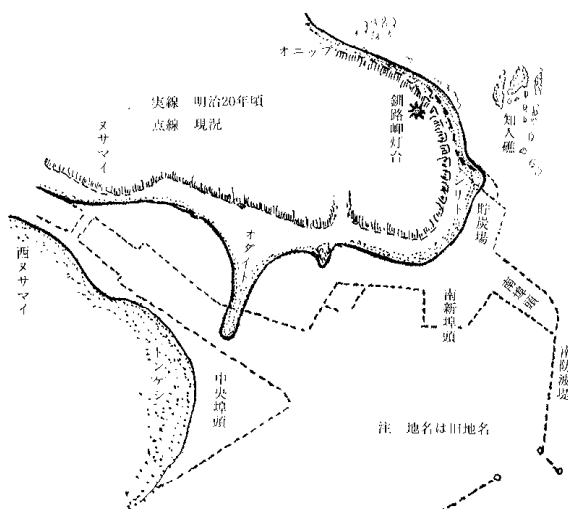
二つ目は海辺にある岩礁との関係での説明である。例えば「そこにある善兵衛の岩まで砂があった」といった表現である。砂浜が減ると隠れていた岩の基部まで出るし、反対に増えると見えなくなる。その岩まで30m余だったり、40m位だったりする。

このような説明方法はまだあげられるが省略するとして、現地に住み、しかも砂浜を生活の場としていた昆布漁家は、自分達の浜が欠けたことを一番よく知っている。

辨天ヶ浜で聞きとりのとき「…辨天ヶ浜の歴史は、浜の潰けた歴史だよ」と聞かされ、その一言に感動を覚えたものであった。

釧路港修築の影響 次は昆布漁家達は、砂浜の減った理由を自然減少だけとは考えていないことに触れなければならない。それは「辨天ヶ浜の砂は知人へ行ったんだ」という表現である。一方知人の人は、ここの今の砂は辨天ヶ浜の分が廻ってきてるものだといっている。そしてその理由は釧路の築港が始まったからだという。築港で砂が使われ、また海の流れが変わって砂が動いたというのである。浜の人達がこのように主張する論拠をのべよう。

釧路港の築港工事の実質的な開始は、明治43年からである。築港工事は具体的には、防波堤築堤であり、また南埠頭の埋立、岸壁の造成である。さらに大正8年からは知人貯炭場の造成がある。とりあえずこの3つの工事と知人岬東側海辺地との関係を追ってみよう。第一の防波堤工事であるが、その骨材は砂・石・セメントである。防波堤の基盤の石は、厚岸のバラサン岬を切り崩し、運んだのは有名な話しの一つであるが、砂は知人岬突端部の砂を利用した。南防波堤だけで、使用した砂は約60,000m³と推算できる。⁸⁾ 60,000m³の砂で辨天ヶ浜に干場を復元するとどうなるだろう。辨天ヶ浜の菊地さんの家は、臨港鉄道より海寄りにある。敷地の海側は防潮堤になっている。防潮堤基部は、岩盤がでており、大時化のときは家にまで波をかぶるという。砂の多かった頃は、屋敷面成りに浜が70m位出ていたという。防潮堤の高さは4m程ある。したがって復元される砂浜は沖出し50mの計算で約600mの延長に相当する。奥行き50m、横600mの砂浜である。今一艘浜を450坪、奥行20間(36m)、間口22間半(40m)



第3図 知人岬西側海岸線の変化

とすると600mの延長の砂浜は、16～17艘浜に相当する。漁家数でいえば、15～20戸程度の乾場が確保されることになろう。この戸数は辨天ヶ浜昆布集落数にはほぼ合致することを考えれば、釧路港修築工事の影響の大きかったことを充分推定させることになる。

次の南防波堤は、泊地浚渫土砂で埋立てたもので、使用分はなかったとする。

貯炭場の造成 現貯炭場は知人岬突出部にあった昆布干場に使用していた場所である。貯炭場と知人集落は臨港鉄道の線路で画されている。さらに貯炭場に岐線が2本入っており、海側岐線沿いの砂浜が、現在の知人浜昆布干場になっている。

貯炭場の造成に併行しておこなわれた臨港鉄道の敷設開始は、大正11年であった。それ迄の昆布干場がこの結果貯炭場に変ったのである。貯炭場に切り換わる当時の干場所所有者は、公斉藤栄太郎である。公斉藤は知人に居住しており、昆布採取漁家に仕込をしていた海産物仲買商である。昆布干場は殆んどが仕込商人の所有になっていた時代である。それまで知人の昆布漁家達が使用していた干場が貯炭場と臨港鉄道用地に売却された経緯について少しさぐって見たい。まず昆布漁家達は、或る日突然「来年から浜は使えないことになった」と一方的に言われただけで、事前の相談などは全くなかったという。今日的には想像のつきがたい措置である。この辺の細部のことにも少なからざる関心もあるが、当事者が現存しないので置くとしよう。さてここで当時の釧路港、また釧路市全体の社会・経済の背景を見てみよう。

釧路港計画 釧路港修築はもとより東北海道全域の拓殖政策との関係で進められていた。実施案は北海道第1期拓殖計画のなかで決定され、工事が施工されていたものである。この第一期拓計は、明治43年度より15ヶ年計画だった。(実質的には17ヶ年となり、昭和元年で終了する)つまり大正10年前後は、第一期拓計が終息し、次期計画を策定する準備期間だった。一方釧路町は、大正9年区制が施行され、つづいて大正11年には釧路市となる。このような背景から釧路市の将来の方向が検討され、それが釧路港修築計画の青写真となるのは当然のことである。その具体的作業を担当したのが、釧路港湾調査会であった。この港湾調査会の立案の一つに、市営事業による南埠頭の造成があった。一方大正9年別保・春採炭山に、三井鉱山の資本が参加し、太平洋炭砒となってくるが、これを期に出炭量は大幅に増加する。それはとりもなおさず、港頭貯炭場・荷役施設が増強したことでもある。別保・春採炭山と港頭を結ぶ臨港鉄道の敷設、南防波堤利用の積込高架棧橋の設置が計画されるのである。さらに、大正9年、釧路川大洪水の発生がある。この洪水は、釧路港に大量の土砂を流入せしめたこともあって、釧路港修築計画の再検討の契機ともなった。さらに釧路川に流入していた阿寒川が、河道を変え、大楽毛川と合流し、現阿寒川筋になるなど、港湾・都市計画全体にわたる影響を及ぼしたのである。現釧路川が開さくされるのも、このことが契機であった。また国内経済全体は、第一次世界大戦後の不況期にあった。このような背景から、太平洋炭砒の別保・春採炭山の本格的進出はきわめて好ましいことであり、地元としては、積極的に進めるべき施策であった。

公斉藤は、港湾調査会委員の一人であり、知人浜を貯炭場に提供すべき、社会責任を一方では負っていたともいえる。

ともあれ知人集落は、このことを機に、成立基盤が大きく変ってしまった。

知人集落の変容 貯炭場の為これらの漁家の一部は、干場を求めて、辨天ヶ浜・千代ノ浦に移転した。また一部は同じ知人地区内であるが、岬の岸上に居住するようになる。臨港鉄道よ

り浜側に居住していた人々である。また鱈釣漁家は、船揚場、また製造干場も失ったので、オダイト方面に移住した。当時海産干場は、頓化地区にもあったが、ここは鯨漁業用干場に殆んど利用されつくしており、干場は全体的に不足していたという。このようなことから辨天ヶ浜・千代ノ浦の海辺砂浜地が、開鱈、そして新たな昆布干場に使用されていった。

知人に残った昆布漁家は、元の干場を工事期間中部分的に借りたり、また築港船入瀬方面の空地を臨時に借りたりしていたという。

ともあれたいへんな苦勞をしたものだという。さて貯炭場の護岸もでき、岐線も入って、それまでの干場はすっかり石炭の下になってしまった。ところが貯炭場の東側にしだいに砂が付き始めてきた。やがて狭いが砂浜ができてきた。知人の人達はこの浜を昆布干場に利用したのである。砂浜はその後増加し、昭和10年頃には3,000坪程になった。ついでこの砂浜を共同利用するため、国に払い下げ申請することになり、許可された。知人共同干場利用組合を結成し管理している。現況の知人浜にはこのような経緯がある。

辨天ヶ浜の人は、自分達の砂が知人にいった。知人の人達は、今の砂は辨天ヶ浜からきたものだというのは、以上のことをいっているのである。さらに砂そのものはもっと多く知人浜についたという。それは築港工事等のため、今の知人浜から相当量の砂が採取された。浜に大きな穴があき水溜りになっていた。それがしばらくすると砂で埋まった。こんなことが何度も繰返されたもので、砂そのものは今の倍にもなるのじゃないか、などと思ひ出話をする者もある。ともあれ、狭い知人浜であるが、知人昆布礁が目の前にあって、他の集落より好条件であるため、昆布干場の上では不利にもかかわらず、昆布採取を主業とする集落が今に続いているのである。

砂が知人浜に寄ったというもう1つの根拠として、千代ノ浦湾の底質の変化があげられている。ここはかつてホッキ貝の漁場であった。広い場所ではないが、3～4隻は巻けたという。そのご殆んど砂がなく、盤が直接でるようになり、ホッキ貝が棲めなくなったというのである。

また釧路川の切替えが完成するのは、昭和6年のことである。さらにこれ以前に南防波堤が完成（大正11年）してることあつて、釧路川から運び出される砂のうち、知人岬東側に漂移する分は、極めて少ないものになったろうと推測するものもある。ともあれ、知人岬東側の海辺地砂浜が減少したのは、マクロに見た自然現象であることの他に、釧路港修築が直接間接の影響をもったことは明らかである。加えて貯炭場造成があつた。このように見てくると、知人岬漁村集落は単純に昆布採取業の側面からだけで成立しているのではないことが明らかになってくる。

臨港鉄道の影響 つづいて臨港鉄道との関係にふれておきたい。春採炭山の石炭を港頭に搬出する方法は、春採坑から、春採湖を船で沼尻に運び、そこから海岸線沿いにきて、米町大通りから港頭にいたる馬車軌道を利用していたが、大正8年には、春採湖南岸沿いに軌道が敷設され、山元より港頭までの馬車軌道で結ばれる。のち前述のように、太平洋炭硯時代になると、現臨港鉄道により、海岸線沿いに港頭に運ばれるようになった。この結果、知人とは違って、辨天ヶ浜の漁家は、線路で背後を絶たれ、海岸に並ぶことになった。臨港鉄道が敷かれた当時はまだ砂浜は30～40m張出していたが、次第に欠けてくる。住居を少し後にずらそうにも線路でできがたい。またその後は崖が迫っていたり、すでに市街化された場所だったりする。漁家

はできるだけ海辺に近く居住する必要があるので、知人から辨天ヶ浜に移った人も含めて再び千代ノ浦へ移住する場合がでてくるのである。

臨港鉄道が敷設されることになったとき、漁家達は強く反対した。理由は、道路へ出るには線路敷を渡らなければならなくなり不便なこと、家並みギリギリに列車が通るので危険であり、騒音が多いこと。それにもまして、狭い土地がますます狭くなるなどであった。臨鉄側は、家への出入りのため、線路は通ってよい、土地の必要な者には附近にあった所有地を貸す等して了解を取りつけたという。また時には石炭を線路敷にわざと落して、漁家達の燃料の足しにしてくれたりしたという。ところが、年数を経過するにつれ、臨鉄の担当者が変わって、話しがチグハグになってきたという。漁家達も一人ひとり臨鉄との係りあいが違うので、集落全体で話し合うことも容易でない。その結果、ああいった、こういったということになり、相互の不信がつのってきたということなのであろう。

とはいえ臨港鉄道がなければ、太平洋炭砒は成立しないし、知人岬東側海岸を通らなければ港頭と結び得なかった。昆布漁家の立場からいえば、大きな犠牲を受けざるを得なかったのである。

以上知人岬漁村集落の漁業外条件を述べた。これらのことは明治43年から、大正10年前後までの間の事柄である。しかも漁村集落成立の基盤にかかわるほどのことであった点に着目し、知人漁村集落史はこの時期を一つの区切りとするのである。

5. 集落の再編

砂浜の再成 貯炭場が造成され、臨港鉄道敷設が完了し、南防波堤基部の高架棧橋が完成すると、知人はそれまでの趣きを全く変えてしまった。干場を失なった漁家達は、一部は岸上に、また一部は、辨天ヶ浜・千代ノ浦へ移転し、崖側に居住していた半数程が残った。しかも干場がないので、これで知人昆布集落は、消滅するかに思われた。一方貯炭場の稼働は、昆布漁家達に、石炭荷役という、新しい仕事の間を提供した。またわずかに残った海辺地を利用し、昆布を細々と採っていた。このようにしているうちに、貯炭場の東側面に、年毎に砂浜が増加してきた。昆布干場が再生されてきたのである。昭和10年、このうち370坪を、知人の共同浜として、国から取得することに成功する。成功するとしたのは、この干場の取得を巡って、一部有力者の政治的な先行出願があったものを覆し、昆布漁家の共同浜とする運動が功を奏したからである。砂はその後も増加してきた。昭和24年、再度国に出願し、2,600～2,700坪の干場が、同じように共同浜となった。現在知人海辺地利用組合がこれを所有、管理している。共同浜出願の際、約30人程のものが出願者になったという。この人員は、払下げを受けるであろう干場面積に比較し、過剰であるが、在住昆布漁家の縁者等が名をつらねたものだという。そしてこれ等の人が、現知人集落の昆布漁家であり、現在の母型になった。砂浜の再生は、集落の再生でもあった。

辨天ヶ浜・千代ノ浦は、知人が貯炭場に変容した頃、まだ干場に余裕があったので、知人から移転するものが何人かあった。しかしその後、辨天ヶ浜は、知人の浜が増加したのに反し、徐々に決壊していく。このため、辨天ヶ浜から千代ノ浦に移転するものがでてくる。大正末期にはまだ余裕があったと見られていた千代ノ浦も、次第に昆布漁家が満度になってくる。

輸出の吐絶 知人岬集落が、釧路港修築の進行、太平洋炭砒の発展等によって、大きく変容をした後、時代は昭和恐慌期に入り、さらに日支間に戦雲が漂ってくる。支那輸出を中心としていた昆布は、一進一退を続けながら、昭和10年代半ばになると、支那市場は完全に吐絶してしまう。昆布漁家は、昆布部分だけでも収支が償わない。昆布漁を切り上げると、家には一銭の金もなかったという。冬は毎日港の仕事に辨当持で通うというのが、大部分の姿であったという。まだ仕込制度が根強く残っていた。このような背景から、全国的な漁村厚生運動にともない、ようやく協同組合運動が芽生えてくるのである。紙幅の関係でこの辺の経緯は省略するが、ともあれ第二次大戦後、昆布漁家は、釧路市東部漁業協同組合を設立し、今日に至るのである。

漁協と集落 漁協組織では、個別集落を実行組合と呼称する。知人岬集落の場合は、知人、辨天ヶ浜、千代ノ浦、春採の4つの実行組合である。各実行組合員数は、表のようになる。

組合員の資格取得要件は、①昭和24年組合結成以前、現に漁業者であったもの ②その継承者 ③分家等により漁業者になるもの、が基本である。分家には養子縁組等が含まれる。なお千島等引揚者で新規組合員として認められたものもある。

実行組合別組合員数

実行組合員	組合員区分		計
	正	準	
知 人	37	1	38
弁 天	17	3	20
千代ノ浦	12	—	12
春 採	15	—	15

たとえば春採実行組合の場合である。15人の組合を同族者を一組合員とすると、11人となる。

この11戸を、春採在住前居住地に振り分けると次の表がで

春採実行組合員の出所

組 合 員 名	同 族 数	知人・ 辨天から	柱 恋	その他	在来 在住
北 島 タ ミ	1	○			
哲 夫					
久 雄	1		柱恋より		
小 窪 一 郎					
為 昭					
佐 貫 繁 雄	1				○
苗 畑 鉄 男	1	○			
二 色 重 吉	1				○
広 尾 継 男	1			唐路より	
公 一	1				
水 島 七 郎	1			千 島	
貝 田 信 雄	1	○			
沼 崎 孝 久	1	○			
猪 狩 正 治	1		柱恋より		
佐 藤 源	1	○			
15	11	5	2	2	2

千代ノ浦実行組合員の出所

組 合 員 数	同族半数	知 人 ・ 辨 天	仙鳳趾	その他	在来 在者
橋 本 祐 治	1				○
質					
高山春吉(橋本 雇用)					注：橋本 の雇用人 から独立
小 林 久 子	除外(定置)				
中 瀬 幸 雄	1				○
駒 井 義 勝	1	○			
苗 畑 武次郎	1	○			
菅 田 新 一	1		仙鳳趾 より		
伊 賀 高 虎	1	○			
タ カ					
岩 井 福次郎	1			岩内より	
荒 関 孫三郎	1			上場所 より	
12	8	4	1	2	2

きる。

千代ノ浦の場合は、12組合員は、8人となり（定置1を除外する）、同様の表が作成できる。さて繰返しになるが、千代ノ浦で、橋本が昆布業を始めた大正末頃、まだ一帯はハマナス原であったという。つまり現住の昆布漁家は、表が示すような場所から、その時期以後移ったのである。なお移住した個々の年月等は聞き取りの際不正確なものもあったので除外した。

岡干場時代 昆布漁家の数は、前浜の昆布礁の良否、干場の広狭によりきまる。その方法は、協同組合が、漁業権行使規程にもとずき、棹数制限、採取期間設定等でおこなう。さらに、原則として、家族労働以外に、他人を雇用して採取することも禁じている。かつて、仕入親方が、数隻の採取船、10～20人の雇用人で、広い干場を独占して、昆布業を営んだ時代とは、全く異なったものになっている。しかし反面、昆布業の企業単位は零細だということになるが、販売信用事業は協同なので、見方によっては、組織化された、大きな規模の企業ともいえる。

さて、昆布業を干場の面から見ると、これまで述べてきたように、連続して後退の歴史であった。この為、昆布漁家はとり分け砂浜の増減、所有権には敏感であり、異状なまで固執する。そしてそのことは、第三者も理解しなければならない。とはいっても絶対量が不足するならば、棹数を更に制限するしかない。それは容易なことではない。

昆布干場用として、岡干場が採用されたのは、知人岬よりも、三ッ浦方面が早かった。ここは、海辺地が自然決壊したので、幸い岸上に、未利用地が多かったこと、かつ集落と隣接していた場所だったからである。もっとも、崖下の浜から、昆布を運び上げるには、ウインチを使うなど、相当の苦労はあった。現在では岡干場だけになった。

知人岬の場合、市街地に隣接してるため、このような用地を取得することは、経済性から不可能である。このため附近の空地、他人の土地を一時借りして、不足分を補う、不便さを続けてきた。臨港鉄道の線路敷迄、昆布を干す仕末である。

このような状態は、昭和40年代まで続いていたが、ようやく、知人岬集落の漁家も岡干場時代に入る。但し、干場の場所は、数キロ遠方の白樺台方面である。水揚げされた昆布を小型トラックで運ぶのである。知人では15～16軒が、(約40%) 岡干場になった。辨天ヶ浜では、浜干場はわずか4軒しかない。千代ノ浦・春採でも同様に、浜干場は27軒中7軒にすぎない。さらに7軒のうちで自己所有者は3軒である。

知人岬の海辺の砂浜決壊を、年月を追って、かつ計測したものはない。しかし古文獻や、古老の話を待つ迄もなく、ここに30年位の間、第三者として浜を見てきた人は、誰れしも、砂浜がなくなった事実を知っている。子供の頃、辨天ヶ浜で遊んだり、そこでゆったりと釣竿を投げて、寝ころんでいたのである。同時に、乾してある昆布を気兼ねしながら歩いたものである。

今その風景はない。そして知人岬には、なお昆布礁と昆布漁家が生き延びている。そして海辺には、これ以上の決壊を防ぐため、防潮堤、テトラポットが累々とした塊りで、白波を砕いているのである。

む す び

知人岬を一周して、そこを純漁村と感ずることは、現況ではできがたい。知人の場合であれば、臨港鉄道を渡って、浜側にまで足をのばすと、狭い干場の線路沿いに、昆布漁船が並び、

貧弱な浜小屋があるので、今通ってきた家並みが昆布漁家であると感じるかも知れない。まして、崖の上にここの半数程の漁家が居住しているとは思えないであろう。崖の上は、米町の市街地の一部になっている。その部分だけを見た場合、そこに漁業集落を見出せということ自体が難問である。辨天ヶ浜の場合も同様である。ここも、米町・弥生町の町並みの一部に融け込んでいる漁家もあり、漁村集落をそこから、独立させて見ることは自体無理な状態といえる。

千代ノ浦の場合は、春採・桜ヶ岡・白樺方面へいく道道の賑いに眩惑され、その地区に昆布漁家があると思わせ難くしている。にもかかわらず、この報告が、漁村集落という呼称をあえて使うのは、たとえその地区全体に占める漁家戸数は少なくとも、漁家自体はその地区全体の一員としての生活のある以外に、地区の漁家だけでの、漁村集落組織を別個に持っているからである。

具体的には、前浜の昆布礁はじめ海を共有のものとしている。かつその利用方法は、共同漁業行使規程によって統一されている。さらに周知のように、漁家経済は、協同組合組織で運営される等々である。そしてこの集落が維持されるための、一定の条件が確保されなければならないことも容易に想定されるであろう。細部は除くとして、昆布漁村集落の場合は、何よりも、昆布礁の保持であり、干場の一定面積の確保である。

その意味で知人岬漁村集落は、干場条件が、自然条件以外に、マイナス面の人為的な影響を強く受け、その結果、現在の集落の姿になったものであることが明らかになったと思う。

註

- 1) 釧路関係日記古文書集、釧路叢書第二巻、松浦武四郎蝦夷日誌集、釧路叢書第一巻
- 2) 新釧路市史第四巻史料編
- 3) 新釧路市史第四巻史料編
- 4) 一艘浜は、この当時450坪だった。
- 5) 釧路漁業発達史、釧路叢書第四巻
- 6) 羽原又吉「支那輸出日本昆布業資本主義史」
- 7) この前後、釧路漁業発達史参照
- 8) 港湾土木技術者による試算